

# かわむら **こども** クリニック NEWS

Volume 6 No 8

6 1 号

平成10年 8月 1日

発行 かわむらこどもクリニック 022-271-5255 HOMEPAGE <http://www.ifnet.or.jp/kazu.k/>

## お母さんの心配

院長

今回は、親の心配について書いてみましょう。

親というものは、子どもを心配するのは当たり前です。何を隠そう小生も、大学生の娘や中学生の息子を心配することもあります。うちの子供たちはもう大きいので、心の中では「余計な心配をして」と、きっと思っているに違いありません。それでも親というものは心配するものです。しかし客観的に見ると、やはり余計な心配もあるのです。「余計な心配をして」と言えない小さな子どもの場合は、どう考えてあげたらよいのでしょうか。

心配というのは経験によって、変わってきます。初めてのお子さんの場合には鼻水が出ただけで心配したくせに、2番目3番目になると鼻水だけでは心配しなくなるものです。他の症状でも同じで熱性けいれんの時など、初めての場合は親がひきつけそうになるほど心配するのですが、なれてくれば「夕べひきつけちゃいました」とあっさり言うてしまうのです。これらは経験による学習のたまものです。

初めてのお子さんが病気になって色々な症状を示しお母さん方が心配することは、一つ一つが勉強と考えるといいかもしれません。突発性発疹症を例えにして、神様が与えてくれた教科書とも言われることがあります。こんな経験を積んで、お母さん達の心配が少なくなっていくのです。

さて心配性の親と楽天家の親、どっちが子どもにとっていいのでしょうか。子どもにとっては心配性の親の方が、間違いが少ないかも知れません。熱と咳が出れば肺炎を心配し病院へ連れて来てただの風邪というほうが、風邪だと安心して肺炎だったということより、子どもにとっての負担も少なく許されることだと思います。しかしいつまでも心配性では、学習の効果というものはありません。病気に限らず経験は、やはり学習効果が上がっていかなければ、無駄になってしまいます。一つ一つが勉強で、それで

人間は進歩していくものなのです。

でも子どもに「余計な心配をして」と、言われないうちにしなければなりません。まして言葉や表現が出来ないこの場合には、その気持ちを親が読み取ってあげる必要があります。心配性のお母さんは、どんなときにも子どもの栄養を心配します。高い熱が

続いて下痢や嘔吐がひどくても、子どもというものは腹いっぱい(ちょっと大げさですが)食べないといけないと思っています。確かに熱の高い時には、誰でもが食欲がなくなるのは当たり前です。自分が熱があれば食べられないのに、子どもにだけは食べなければならぬと思ってしまうのです。牛乳を飲ませて下痢が直らないと言っているお母さんも、同じことです。同時に二つの心配を満足しようとしているのです。その心配のため無理やり食べさせられる子どもの気持ちはどうでしょう。ひょっとしたらこれも虐待のうちに入るかも知れません。二兎を追うものは一兎も得ずの諺どおり、結局どちらかを優先するしかないのです。心配性のお母さんはそのことが見えてこないのです。

理想なお母さんのタイプは、始めは心配性でいいのです。でも経験を積んで学習していき、早く楽天家のお母さんになるよう努力しましょう。そのほうがお母さんのストレスが少なくなり、結果的にお子さんも伸び伸びと育つに違いありません。子育てを楽しむには、早く楽天家になれるかどうかではないでしょうか。



## 8月のお知らせ

栄養育児相談

毎週水曜日

13:30~14:30

栄養士担当



## 夏季休暇について

8月10日(月)~15日(土)

12月31日が休日当番のため、例年より1日長くなっています。皆様には、大変ご迷惑をおかけしますが、ご了承お願い致します。

## 学会による休診について

福岡で、日本外来小児科学研究会が開催されます。学会参加及び「INTERNETと医療相談」発表のため

8月28日(金)午後~29日(土)

が休診となります。御迷惑をおかけします。

## 読者の広場

まだまだうっとうしい梅雨空です。いつもなら患者さんの数も減るころなのに、今年はだらだと、風邪が続いています。すっきりと晴れてしまえば、病気も少なくなるのに。先月もたくさん投書をいただいたのですが、スペースの関係で載せられなかったことをお詫びします。宮城野区の稜太君のママから小児外科紹介のお礼、宮城野区の柴田さんからは入院した時の感想とお礼を頂きました。また泉区の都築さんからは日ごろの感謝の気持ちを頂きました。3枚にもわたる力作で夜中の2時までかかって書かれたようです。そして『都築家ニュース』ありがとうございました。紹介したかったのですが、あまりにも自慢話になりそうなので今回は省略しました。小生・スタッフ共々、ここにこしながら読みました。



泉区のSさん(こちらで匿名にしました)から、実家へ帰ったときの病院への入院についてお手紙頂きましたの、一部紹介します。「喘息がひどくなり、主人の実家に居りましたので急きょそちらの病院で処置していただきました。その際私の胸が痛んだ経験をしました。先生に読んでいただいたと思えるだけで満足する内容ですので、一目していただければ幸いです」で始まる長い手紙です。その中に主治医から言われた言葉が載っていました。

・風邪も進行しているの、すぐ良くにはならない。...(当然のことです)

・私(主治医)からすれば、あなた(私)はジタバタしてわがままな母親だよ。そんなお母さんだから、こういう神経質な子どもになるんだ。いるんだよね。こう勝手な親子が。

・あなた(私)のとりまき(主人実家)が、なけなしの知恵でいい加減なことをいって。...(とてもショックでした。主人の両親も孫のために嫁のためと思ってしていることなのに)

お母さん自身も医師に対する対応を反省していましたが、こんなことは言うべき言葉ではありません。小生も診察中お母さん達の子どもに対する対応や、言葉遣いにカチンと来ることはあります。なるべく我慢するつもりでいます。やはり、病気の子とそのお母さんを相手にしているのですから。インターネットの医療相談でも、同じようなことが何件かあります。このことは、自分を含め小児科医師として反省しなければいけないことと思っています。

もう一つ、以前当院に通院していて転居した柴田郡の上田さんから、手紙を頂きました。「先日はお忙しいところにお電話をさしあげて申し訳ありませんでした。診療中にもかかわらず。本当に御親切にお話しありがとうございました。今までホームドクターのように先生を頼りにしていましたので、転居したにもかかわらず、つい頼ってしまいました。40~41もの高熱が5日間も続くと、親としてはどうしたものかと思い悩みます。心配です。親の動揺が子どもにも伝わるのか、なかなか熱も下がらずだれかに相談しようにも町立の病院では時間外では「お薬でてますよね」と言われるだけで、親の心配までは見てくれません。思わず先生のところへ電話を入れてしまいました。先生に話を聞いていただいたり、また「座薬でも熱が下がっているときに元気であれば、安心の目安ですよ」と教えていただいたそのひとことで、今までの不安や胸に詰まっていたものが、ふっと取れたようでした。



おかげ様で、次の日の午後から少しづつ熱も下がりはじめました。母親の安堵が子どもにも通じたかのようにご飯も食べはじめ、水分も自分から欲するようになり、元気になってきました。今日はやっと1週間ぶりに36台になりました。長い1週間でした。先生には、どんなふうに感謝の気持ちをお伝えしたらよいのかわかりませんが、まずはお手紙で失礼いたします。最後にもう一度、本当にお世話になりました。ありがとうございました。」この後に大阪に引っ越した患者さんのお母さんからも、相談の電話をいただきました。以前も書きましたが、どこに行ってもうちの患者さんです。今かかっているお母さん方に対して、こういうことが無いように、教訓のひとつとして肝に銘じておきます。

## 7月の感染症の集計



気候が夏でもないにもかかわらず、夏カゼとしての手足口病。発疹が出るカゼ、ヘルパンギーナ等やはり目立っています。また診断は難しいのですが、結膜炎・発熱等が見られるアデノウイルスと思われるカゼも比較的多く見られました。グラフでは少ないように見えますが、水痘・おたふくは相変わらず流行しています。

## 編集後記

夏がいつまでも来ないようです。病気のパターンも、例年とは異なるようです。やっと半年間待った夏休みです。皆さんには御迷惑をおかけしますが、リフレッシュするつもりです。よろしく!!。

